～地域みんなで子どもの未来を応援するために～

広がれ こども食堂の輪！

活動ガイドブック

続けるための

支える・つながりづくり編

はじめに

山崎美貴子

東京ボランティア・市民活動センター所長
「広がれ、こども食堂の輪！」推進委員会委員長

この冊子はシリーズ３冊目です。１冊目2冊目で多様なこども食堂を紹介してきましたが、今回はこれまで取り上げてこなかった地域、例えば子どもの貧困が29.9％と発表された沖縄県や、東北をはじめ各地で震災復興が続いていますがその中の１つとして宮城県の活動などをご紹介しています。地域の抱えている課題はそれぞれですが、一緒に食卓を囲むことで生まれる空間が醸し出すものは同じで、どこも新しいつながりをつくったり、支えあったりしていることがわかります。

最後にあります西野博之さんからのメッセージには、「ながら相談」の話が出てきます。相談室で「どんなことに困っているの？さあ、話してごらん」と言われてもなかなか話せない。横に並んで野菜を切ったり、一緒に食事をしたりしていると「あのね、昨日ね」と子どもたちが話し始めると言うのです。「美味しかったね、楽しかったね」と言い合える言葉の中に、子どもたちが安心感を覚えて話したくなるような雰囲気ができるからだと思います。こども食堂は、さまざまな思いを持ち込んできた子どもたちが主人公になるために、大人たちがお手伝いをしている場だと思います。子どもにとって、温かい食べ物が食べられる場であるだけでなく、安心して居られる居場所になったり、学習ができたり年齢の違う人と遊ぶ場所になったりと、とても大切な場になっています。

この大切な場が継続していくにはどうしたらいいでしょうか。今回の冊子では「続けるための　支える・つながりづくり編」として模索をしています。こども食堂は、活動する主体が頑張るだけではなく、活動を支えるさまざまな組織があってこそ成り立ちます。そのさまざまな支える側の中から、今回はJAや民間企業をご紹介しています。JAは地域により多様な形で支援をされています。企業は、全国的に広く、あるいは地元企業の場合も生活圏となる地域より広いエリアを対象に支援をしている特徴がみられます。こども食堂の中には、企業や自治体、その他の関連機関とネットワークをつくりながら、地域の子どもたちの未来を考えていく仕組みを、すでにつくり始めているところもあります。これは日本の新しい文化の創造であろうと思います。

私たちの歩みは決して大きなものではありません。しかし、みんなで繋がりあうことにより、次の時代の子どもたちの命と生活を守っていける、新しい文化を創造する１つの試みをご提示できているのではないかと思います。

さまざまな支えがあれば、これからもこども食堂の取り組みは広がっていくことができると思います。みなさまの温かいご支援をお願い申し上げて、「はじめに」の言葉に代えさせていただきます。

CONTENTS

目次

はじめに 2

巻頭特集

沖縄の居場所・食支援 6

あおぞら広場 ~宮城児童館~ 8

子ども元気ROOM ~カナカナ~ 10

てぃーだこども食堂 12

子どもの広場in那覇 14

住吉国際ジュニア倶楽部 16

沖縄ノート 18

全国に広がった! こども食堂の輪! 22

東北地方　やっぺす! ママこども食堂 24

中高生が提供するOneコインカフェ Caffè neppape 26

北海道地方　西野こども食堂kaokao 28

あさぶ商店街 麻生キッチンりあん 子ども食堂りあん 30

こども食堂ぽんぽこ 31

東海地方　あじまわいわい食堂 32

つなぐ子ども食堂 34

九州地方　みやこや 36

こども食堂を支援する取り組み 38

JAの支援 39

企業の支援 42

ネットワークの必要性 48

これまでとこれから 54

メッセージ 58

認定NPO法人スペースたまりば代表 **西野博之**さん

「28年間、毎日お昼ご飯を
一緒につくって
一緒に食べてきた」

おわりに 62

巻頭特集

沖縄の居場所・食支援

29.9%

2016年1月、沖縄県は県内の子どもの３割が貧困状態にあるとする調査をまとめ、発表しました。厚生労働省が調べた全国の貧困率の約２倍のレベルに達する衝撃の数字でした。県の「子どもの貧困対策計画」はここからスタート。沖縄の子どもを取り巻く厳しい状況を踏まえて、16年度から国の緊急対策事業も実施されています。その柱の一つが子どもの居場所の運営支援です。

それまで「こども食堂」を始めていたのは、ももやま子ども食堂（沖縄市）など県内にわずかしかありませんでした。こども食堂など子どもの居場所づくりの活動が、「地域の活動を行政が後押しする」（喜舎場健太・県子ども未来政策課長）形で一気に広まったのが、沖縄の特徴と言えるでしょう。

支援対象は「地域の実情に応じて食事の提供や生活指導、学習支援等を行う」団体。夜間の送迎も対象になります。こども食堂に代表される子どもの居場所は、２年間で県内26市町村、126か所（18年6月現在の県調査）と一挙に増えました。その8割が食支援を実施しています。

実態調査により子どもの貧困の深刻さが明らかになったことで、多くの人が様々な形や思いで、子どもの居場所づくり、食支援に乗り出しました。そんな沖縄の状況を、取材で訪れたいくつかのこども食堂の事例を基に紹介します。

児童館が開く地域に寄り添ったコミュニティー型のこども食堂、行政の枠組みのど真ん中で活動する子育て中のママ、PTA主導でこども食堂を始め、試行錯誤しながら個別の進学支援も始めたビジネスマン、「誰でもおいで」のオープン型で、年300日以上連日のように開いているこども食堂…。今回出会った方々だけでも、本当に多くの活動形態がありました。

「行政主導」といった沖縄の特殊性はありますが、沖縄で活動するそれぞれの人の思いや経験を紹介することが、全国のこども食堂のこれからを考えるうえで、たくさんの示唆を与えてくれるのではないでしょうか。あわせて、沖縄の取り組みで注目すべき点や今後の課題を、行政担当者や活動の当事者がどう考えているかもお伝えしたいと思います。

「ゆいまーる」の拠点
学校ともつながる

本島中部与勝半島から、海の中を走り抜けるように海中道路が伸びています。その海中道路を通り、きれいなビーチとマリンスポーツで有名な観光スポット伊計島へ向かう一つ手前にある島が宮城島です。島の中心部、サトウキビなど南国らしい草木に囲まれた場所に宮城児童館があります。17年から月1回、あおぞら広場と名付けたこども食堂を始めました。隣り合う伊計島と平安座島からも、なるべくたくさんの子どもたちに来てもらおうと、送迎バスを出しています。

児童館は、約30年前の与那城村（現うるま市）時代に開館しました。沖縄ではまだ児童館が珍しい時代だったそうです。指定管理者は自治会長です。あおぞら広場だけでなく、学童クラブ（月～土）や子育て支援事業（毎週金）、中高校生を対象とした学習支援活動もしています。母子家庭の母親が仕事に出ている間、夜9時まで子どもの面倒を見る生活支援も実施しています。職場は島内にはなく1時間近くかけて本島まで出なければなりません。このため、学童クラブは普通よりも遅い夜７時まで預かっているそうです。利用料も格安にしているといいます。

一方で、夜の生活支援は地域の人が担当します。月に1回開催されるこども食堂には、地元の農家からゴーヤやオクラなどの食材の提供があります。80歳過ぎのおばあちゃんが子どもたちにゆし豆腐づくりを教えます。お互い困ったときには支え合う、地域の助け合い、沖縄のことばで「ゆいまーる」の拠点となっているのです。

夜の生活支援は受け入れられる子どもが限られます。そのため地元の小学校との連携が欠かせません。「学校とつながらないと子どもたちの情報が入らないから」と豊永館長は言います。豊永館長や自治会長が小学校で読み聞かせのボランティアをしたり、児童館のこども農園に幼稚園児も呼んで野菜づくりをしたりしています。

あおぞら広場は、子どもの居場所事業として行政の助成を受けているので、来る子どもたちはみんな受け入れています。うるま市内に6つある児童館はすべて、こども食堂を開いているほか、中高生の居場所事業も実施しているそうです。「いろいろな活動が、この児童館でつながっていけば良い」と豊永館長は話します。

運営主体
宮城児童館
住所
沖縄県うるま市与那城宮城 163
宮城児童館
連絡先
TEL 098-977-7924

あおぞら広場
～宮城児童館～（うるま市）

豊永栄子 館長

365 日子ども受け入れ
初もうでや誕生日会も

南風原町の「子ども元気 ROOM」は、「他の市町村が今後、モデルにしてほしい」（喜舎場・県子ども未来政策課長）とされる取り組みです。夏休みなどの長期休暇を含めて 365 日子どもを支援します。その拠点となるのが、町内に設けられた 2 つの「子ども元気 ROOM」。金曜の夜から日曜までの週末と祝日を担当するのが、松田さんのカナカナが運営している居場所です。今は一軒家の一階を借りています。

この取り組みの最大の特徴は、町こども課の「子ども元気支援員」に子どもたちの情報が全部集まることです。教育委員会や社会福祉協議会ともつながっていて、関係者は週 1 回会議を開き、情報を共有します。どの子どもを支援すべきか、お互いの情報を持ち寄って決めます。支援できる子どもの人数は決まっているからです。親の同意を得たうえで支援対象の子どもを決めたら、365 日、2 つの元気 ROOM で受け入れます。町は、関連の全予算をこの事業につぎ込み、子どもの貧困対策に息長く取り組もうとしています。

松田さんによると、元気 ROOM の定員は 15 人。小学生が対象です。一緒にきょうだいが来ることもあるので、実際には 1 日平均 15 人前後の子どもたちに対応しているといいます。金曜は午後 3 時から夜 10 時まで、土日祝は午前 9 時から午後 6 時まで。食事支援だけでなく生活支援から学習支援を含め、まるごと子どもを受け入れています。年末年始も預かって、一緒に初もうでにも出かけました。誕生日会も開きます。

誕生日会の経験がなく、その意味が分からず「これって、おれのための会？」と聞いてきた子どもがいたそうです。ちゃんとした食事をとることが大切なことを知ってもらうために、まずは食に関心を持ってもらおうと、一緒にご飯を作ることから始めました。

松田さんは、1 歳違いの 2 人の子どものママです。この事業に取り組む前から、母子が気軽に立ち寄れるキッズレストランを運営していました。そこでは学童クラブもやっています。年子を抱えて子育てに悩んだ経験、「なんでクラブの会費がこんなに高いの」といった疑問を出発点に、自ら立ち上げたものだそうです。何事にも前向きな松田さんは、町が「子ども元気 ROOM」の運営者を募集していることを知り、真っ先に手を挙げました。子ども支援の専門的な経験はありませんでしたが、もう一つの元気 ROOM を運営している侍学園の校長を「スーパーバイザー」と呼び、知識やノウハウを吸収。他の施設を見学したり研修を受けたりしながら、日々、自分が成長しているのを実感しているそうです。

運営主体
一般社団法人カナカナ
住所
沖縄県南風原町字照屋 88 番地 1 階
連絡先
TEL 098-987-1009
FAX 098-996-4903

子ども元気 ROOM
～カナカナ～（南風原町）

カナカナ代表理事 松田かなえ さん

PTAが立ち上げ お手伝いしたら無料に

でぃーだこども食堂は2015年5月に浦添小のPTAが立ち上げました。沖縄で２番目のこども食堂です。代表の梁さんによると、きっかけは、ネグレクトが疑われる３人の幼いきょうだいの存在でした。親たちが話し合って、13年に「衣服のゆいまーる」を始めました。いらなくなった衣服を譲り合って困っている子を助けようという試みでした。近隣の三つの小学校が参加し、子ども服の「おさがり会」を開きました。着古した服は、自分の子が通う学校とは違う学校の子に譲る。譲られた子は「おさがりの服」だと周りに知られることなく着ることができるわけです。譲られる子には保健室指導の一環として、着替えさせる形で持ち帰らせる配慮もしました。

その後、給食がない日に子どもたちへ食事を出すこども食堂に発展したそうです。地域の協力を得て行う地域貢献活動として、PTA総会の承認を得て始めました。でも、予算はPTAとは別会計。場所は児童館を借り、食材などの経費は、市の助成金や寄付で賄ったといいます。

しかし3年間続けてみて、子ども支援のプロでない限界も分かったといいます。「子どもたちを丸ごと受け入れることと、甘やかしてしまうことを、きちんと区別して対応するのは、素人には難しかった」と梁さんは言います。意見の違いから、運営にきしみが生じました。3年間の経験から得た教訓は、「こども食堂でできることは限られている」と割り切り、「やってる大人が笑ってできる食堂」を目指すことだと言います。

18年春から抜本的にリニューアルしました。ボランティアのお母さんたちが無理なくできるメニューにし、社会のルールを身につけてもらうため「調理や片付けのお手伝いをしたら、無料で食べられる」ことにしました。

梁さんは今、中学生を対象にした無料塾に力を入れています。対象とするのは将来大学進学を目指す数人。支援の内容は学習指導だけではありません。親に通学費の負担をかけたくないと、歩いて通える高校に進学しようとしていた子に対し、沖縄都市モノレール（株）がモノレールの通学運賃の半額を負担する取り組みなどの話をしたら、行きたい高校に行っていいんだと望んだ進路に変え、受験の準備をしています。

梁さんは県内の広告会社で働くビジネスマンです。子どものころ、家庭は生活保護を受けていたそうです。学校の先生の励まし、助言のおかげで大学に進学でき、今の自分があると思っています。「家庭環境を理由に大学進学をあきらめる子どもを一人でも減らしたい」と願っています。

学校との関係も重視しています。学校関係者や自治会長、民生委員らと年に2回、会議を開き、気になる子どもの情報などを寄せ合い、対応を話し合っています。

運営主体
てぃーだこども食堂
住所
沖縄県浦添市仲間 2-47-5 うらそえぐすく児童センター内
連絡先
TEL 090-3795-3437
mail x10ahiro@gmail.com

てぃーだこども食堂

（浦添市）

代表 **梁 裕之**さん

仲良い夫婦で向き合う
居場所提供、大人の責任

那覇市中心部を少し外れた、交通量の多い通りに面したビルの一階に、「子どもの広場in那覇」はあります。日曜日の夕方に訪れると、20人以上の子どもたちが、60～70平方メートルほどの部屋の床に座り込み、ゲームなどに興じていました。一角に用意された食事を、子どもたちは好きな時に取りに行けるスタイル。まさしく「放課後の居場所」を提供している形です。近隣の複数の小学校の子どもたち300～400人が登録しているそうです。

細田さんは元牧師。9年前から教会で子どもの居場所事業をしていましたが、思い切って牧師を辞め、2年前から「こども食堂付きの居場所」を始めました。夫婦ともう一人のスタッフの3人で運営しています。以前は365日開いていましたが、スタッフが過労で倒れ、毎週火曜は休むことにしました。沖縄の子どもの現状に心を痛め、特に「壊れた家庭が多い」ことにその原因があると考える細田さんは、「夫婦は愛し合うものだ」という具体像を見せるためにも、夫婦で仲睦まじく子どもたちと向き合っているそうです。

朝10時から夕方6時半まで。日曜は午後2時から。でも日曜日も朝から来てしまう子、ほぼ毎日顔を出す子もいるそうです。食材を提供してくれるレストランや弁当屋さんがあったから始められたし、今もやっていけるのだといいます。通りがかった人が実情を知り、家で余ったものを持ってきてくれたこともあるそうです。今でも運営は厳しい状態が続き、食材を含め寄付は大歓迎だそうです。

「子どもに居場所を提供するのは大人の責任。子どもを地域で支援する環境がここにできれば、それが完成形。こうしたこども食堂が、小学校区に一つずつできれば良いと思っている」と細田さんは話します。

運営主体
一般社団法人ビクトリーチャーチ
住所
沖縄県那覇市上間 245-1 南風ビル 102
連絡先
TEL 098-911-6911
URL
http://okinawakodomonohiroba.com/

子どもの広場in那覇
（那覇市）

ビクトリーチャーチ代表理事 **細田光雄** さん

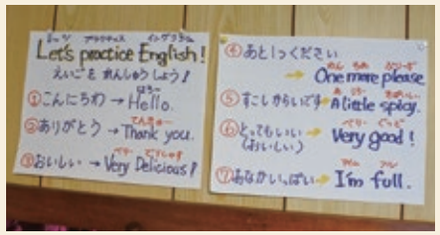
「助け合い」の輪で運営
口コミで集まる子たち

東アジア最大級の米空軍基地嘉手納基地を抱える沖縄市。住吉国際ジュニア倶楽部は、市の中心部、コザ十字路から西へ700メートルほど離れた場所にあります。かつて拠点としていた教会は取り壊され、今は近くの民家１階を借りて活動しています。

主にホームレス支援活動を行い、那覇市の教会を拠点とするNPO法人が運営しています。正月三が日を除き毎日午後4時から8時まで、子どもの居場所支援をしています。この地域は沖縄市の中でも生活保護世帯が多い地域だといいます。小中学生らが誘い合って訪れ、私たちがうかがった日も午後4時過ぎには20人ほどの子が訪れていました。この日は、たこ焼きパーティーでした。スタッフがプレートに具材を流し込むのを、机を囲んで今か今かと見守ります。

スタッフの一人は、母子家庭で病弱の子を抱え、ストレスから子に暴力を振るうようになった経験があるそうです。そんなとき、このこども食堂に出会ったことで心に余裕ができ、自分を取り戻すことができたといいます。子どもも、学校でいじめにあったとき、こども食堂で顔見知りになった1つ年上の子に助けてもらったことがあるそうです。そんな縁でボランティアとして食堂を手伝うようになり、今は雇用契約を結んで働いています。

代表の荒木さんは13年前、ホームレスでした。那覇市の教会が行うホームレス支援に助けられたのが縁で、このNPO法人の活動にかかわるようになったそうです。「人間お腹がすいたら何をするか分からない。子どもたちにはそんな思いはさせたくない」との信念で食堂をやっています。



法人は3年前からすぐ近くにあった教会でこども食堂を始めました。沖縄市の居場所事業の助成を受けてから数えると、今年で3年目となります。市から頼まれて誘った子もいますが、だいたいが口コミで知って来た子たちだといいます。きょうだいや友達同士で来る子がほとんどです。子どもの食事は無料。人件費や借りている民家の賃料、食材費には助成金が出ます。市場関係者から食材の寄付があるほか、外国人を含むキリスト教関係者、また時には遠方からの寄付もあるそうです。

運営主体
住吉国際ジュニアクラブ
住所
沖縄県沖縄市住吉 1-11-23
連絡先
TEL 080-2690-2244

住吉国際ジュニア倶楽部（沖縄市）

代表 **荒木英一郎** さん

沖縄ノート

「貧困対策」は行政が行うべきこと

2016年度に始まった内閣府の居場所支援事業は、19年度も継続されるものの、国からの補助割合を含め見直しが行われる予定です。県子ども未来政策課の**喜舎場課長**は「この（2016～18年度の）3年間は、市町村ごとにいろいろな形の事業が行われた。その成果を踏まえ来年度以降は、県としても事業の方向性を整理する必要があると思っている」と話します。

居場所事業を「ユニバーサル型（地域型）」と「個別支援型（拠点型）」に大きく分けたうえで、行政としては異なるスタンスをとる必要があるのではないか。地域型の必要性を認めたうえで、困窮児を救済するには拠点型をもっと整備する必要があることは間違いありません。国からの予算は拠点型の整備に重点的に振り向ける一方、地域型についてはそれを支援するネットワークづくりやスタートアップ助成、研修などで県としての役割を果たしていく必要がある、と考えているようです。

喜舎場課長が拠点型の例として挙げたのが、事例紹介で取り上げたカナカナの子ども元気ROOMであり、那覇市母子生活支援センター「さくら」が行っている「子どもの生活学習支援」「夜の子どもの居場所運営支援」事業でした。

さくらは母子支援の入居施設。子どもの生活学習支援は、ひとり親家庭の就学児を無料で預かり、主に学習支援に力を入れています。夜の子どもの居場所は2～12歳の子を下校時から夜9時まで預かり、宿題、夕食、入浴の支援をし、送迎もします。「お風呂は大事な生活習慣。体の洗い方を見れば普段の生活が推測できるし、性教育にもつながります」と同センターの山内真寿美さん。主に学校や民生委員からの情報で児童を受け入れるそうです。月1回第1金曜には、預かり児童の母子に入居者も加わって夕食を食べます。60食ほど用意します。母親同士の情報交換の場になっているそうです。

運営者も目的別に差別化の試み

沖縄で初めてこども食堂を開いた、ももやま子ども食堂（沖縄市）は当初、食事支援が中心でしたが、平日夜も子どもだけで過ごしている家庭が少なくないことなどを知り、「夜の子どもの居場所」を始めました。水曜以外の平日週4日、下校時から夜7～8時くらいまで。ほぼクローズ型で子どもは1日5～8人くらいまでにして、スタッフ3人ほどに学生ボランティアも加わり、マンツーマンに近い形で対応しています。落ち着いて過ごしてもらうため中高生限定の日も設けています。

毎週土曜に開くこども食堂はだれでも受け入れています。その中で気になる子に声をかけるほか、学校の支援員など他の機関からの紹介もあるそうです。常勤スタッフの**菅原耕太さん**によると、毎日終了後に担当したスタッフが記録を作り、子ども1人ひとり個別に支援のための活動計画を作っています。また、学生ボランティアにも30分はオリエンテーションを行うそうです。

「ここに来る子どもたちは（親代わりだったり親の手伝いだったり）家庭で必要以上なものを背負っている。ここではなるべく子どもらしく過ごしてほしいと思っている」と菅原さん。だからこそ、オープン型でわいわいやるこども食堂、じっくり向き合う夜の居場所といった、いろいろなタイプを用意する必要があると考えているそうです。

みんなで食事づくり「ももやま子ども食堂」

てぃーだこども食堂の**梁裕之さん**は、本当に困っている子、声を上げられない子に焦点を当てたい、と無料塾に力を注ぎます。一方で、こども食堂はこれからも続けるといいます。「小さいころから子どもたちとつながって、顔も覚えられているからこそ、その後の個別支援を受け入れてもらえる」と思うからです。こども食堂を4年間やってきた活動がようやくつながり始め、地域が変わりつつあることを実感しているそうです。

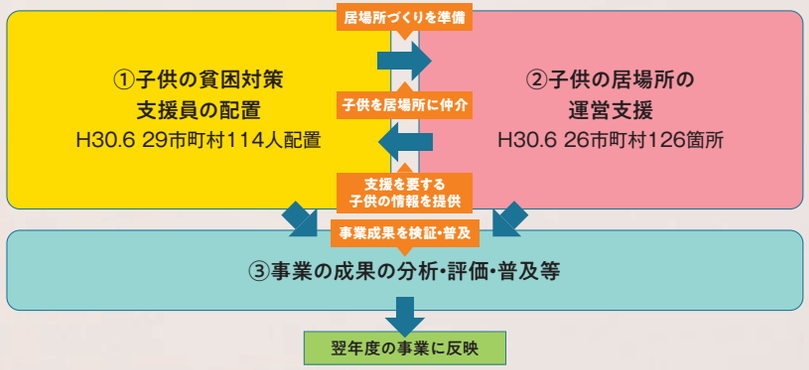
学校現場との連携がポイント

沖縄県内で実施されている子供の貧困緊急対策事業は、①子供の貧困対策支援員の配置②子供の居場所の運営支援、の2本柱です（下記図参照）。関係者が手ごたえを感じているのが、支援員の配置による学校現場との連携です。

支援員の役割は、学習支援や居場所づくりを行うNPOなど関係機関と学校との情報共有、個別支援につなげるための調整、つまりソーシャルワークです。そのためにまず、県の福祉部門と教育部門が連携して学校訪問を実施しています。学校に福祉のことを理解してもらったうえで、支援員が学校現場に入ります。支

図:沖縄子供の貧困緊急対策事業

［H30年度予算 1,202,467千円（補助率10/10）］（うち、県分120,310千円）



援員の研修にも力を入れています。また、地域によってニーズが異なるため、県内を４地域に分けて支援員向けの相談事業も実施しています。こうした細かい配慮・工夫が実を結んでいるといいます。

「カナカナ」の取り組みで紹介した通り、今後のモデルとされる南風原町の取り組みでも、この支援員が関係者をまとめるキーパーソンになっています。

今回取材した沖縄のこども食堂は、学校ときちんとした関係を結んでいるところが多かったと感じます。

地域の居場所「夢空間たんぽぽ」（沖縄市）を構える**古堅理枝子さん**は、学校と連携しながら、不登校の子どもたちも受け入れていました。前が泡瀬小学校、横は公園という理想的なところにある居場所には、子どもだけでなくお年寄りも立ち寄ります。子育て中の人が「ちょっと子どもを見ててね」と言える、地域をつなぐ役割も担っています。

「夢空間たんぽぽ」の隣の公園

てぃーだこども食堂や宮城児童館は学校との協議の場を持っていました。住吉国際ジュニア倶楽部の**荒木英一郎さん**は「親代わりに授業参観に行ったこともある」と話していました。夫婦でやっているカフェが始めた那覇市のお結びキッズクラブも、始めるときに近くの小学校の校長に挨拶し、各教室でチラシを配らしてもらったそうです。

それぞれに継続を模索

モデル事業開始から３年が経とうとし、2019 年度以降、国の補助率が見直しされる話は関係者の周知となっていました。それでも、行政の思惑とは距離を置き、自分たちの活動を何とか続けようと考えている言葉も、多く聞かれました。

住吉国際ジュニア倶楽部の荒木さんは、「まずは子どもたちが安心できる居場所づくりを続けることが大事。まだ３年目です。生活支援の効果は徐々に出始めています。長い目で見てほしいですね」と話していました。

てぃーだこども食堂の梁さんも「いずれ自己資金を求められる。それだったらできる範囲のことを丁寧にやりたい」と言います。大人が無理をしないこども食堂のあり方は、そうした考え方から生まれたものだそうです。

ももやま子ども食堂の菅原さんは「行政からの助成がこの先どうなるかは分からないが、どちらにしてもこの活動を止めるわけにはいかない。自分たちでどうやって収入を確保していくか、考える必要がある」と話します。

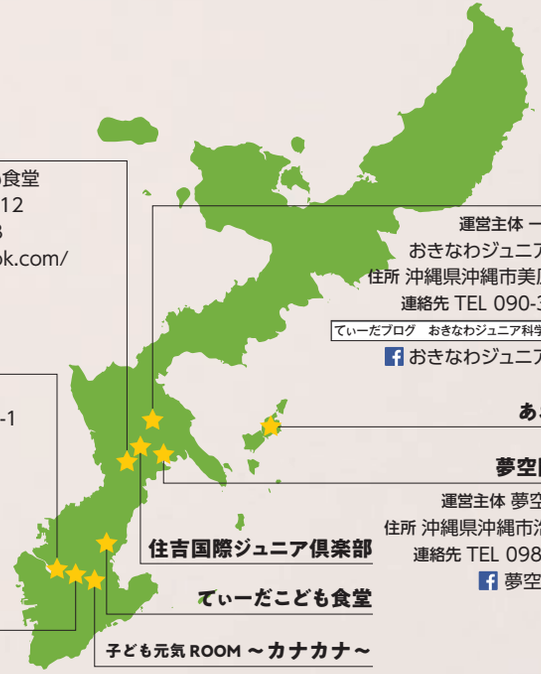
こども食堂のほか、学習支援に科学教室、ものづくりを取り入れている、おきなわジュニア科学クラブこどもの居場所「美ら団子」（沖縄市）代表の**宮城薫さん**は「活動の継続には、地域のネットワークづくりが大切」と話します。もう一歩進めて「地域単位で、子ども支援に関わる人たちの運営協議会ができるといい」と期待します。

食育ホットケーキアート教室「美ら団子」

行政の助成対象が個別支援型の困窮児対策に絞られたとしても、敷居の低いオープンなこども食堂が必要なことは、沖縄の実情からも見えてきました。まだまだ数も足りません。お結びキッズクラブの**穴倉美佐子さん**は「私たちのような飲食店なら比較的気軽に始められるし、もっとこういう取り組みが広がればいいと思っています。たくさんの人が少しずつかかわることが大事ではないでしょうか」と話していました。

飲食店で取り組む「お結びキッズクラブ」

掲載先



ももやま子ども食堂
運営主体 NPOももやま子ども食堂
住所 沖縄県沖縄市上地3-20-12
連絡先 TEL 080-6489-3263
URL https://www.facebook.com/momoyamakodomo/

お結びキッズクラブ
運営主体 お結びカフェ訓
住所 沖縄県那覇市小禄1652-1
連絡先 TEL 098-858-8256
URL http://cafekun.com

子どもの広場 in 那覇

美ら団子
運営主体 一般社団法人おきなわジュニア科学クラブ
住所 沖縄県沖縄市美原2-8-7 2階
連絡先 TEL 090-3582-3323
てぃーだブログ おきなわジュニア科学クラブ 検索
おきなわジュニア科学クラブ

あおぞら広場

夢空間たんぽぽ
運営主体 夢空間たんぽぽ
住所 沖縄県沖縄市泡瀬2-50-25
連絡先 TEL 098-987-8341
夢空間 たんぽぽ

住吉国際ジュニア倶楽部

てぃーだこども食堂

子ども元気 ROOM ～カナカナ～

全国に広がった!

こども食堂の輪!

今回の冊子は３冊目です。
3冊のガイドブックを合わせると、
全国に広がったこども食堂を
ご紹介することができました。

中国・四国地方

みんなの食堂 ～琴平社協～〈香川県〉(vol2)
しうん子ども食堂〈香川県v(vol2)
ヌーベルかんざき〈香川県〉(vol2)
かねとう子ども食堂〈香川県〉(vol2)
楽しく朝食を食べる会 ～鴨田小学校～〈高知県〉(vol2)
こども広場〈高知県〉(vol2)
水曜校時カフェ〈高知県〉(vol2)
子どもを中心とした地域の居場所「えいや家」〈高知県〉(vol2)

近畿地方

にしなり☆こども食堂〈大阪府〉(vol1、vol2)
プレーパーク　にしなりジャガピーパーク〈大阪府〉(vol2)
松野農園〈大阪府〉(vol2)
NPO法人フェリスモンテ〈大阪府〉(vol2)
母子生活支援施設　東さくら園〈大阪府〉(vol2)
にぎわい広場〈滋賀県〉(vol1)

中部地方

信州 こども食堂〈長野県〉(vol1)
山代ファミリーサポートセンター〈石川県〉(vol2)

本編 P32～35

北海道地方

本編 P28～31

東北地方

本編 P24～27

関東地方

池袋こども食堂／NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク〈東京都〉(vol1、vol2)
烏山プレーパーク 中高生夕食会〈東京都〉(vol1)
Kiitos(キートス)〈東京都〉(vol1)
喜多見児童館 じどうかん食堂〈東京都〉(vol1)
子ども村:中高生ホッとステーション〈東京都〉(vol1、vol2)
だんだんこどもカフェ／気まぐれ八百屋だんだん〈東京都〉(vol1、vol2)
めさみーる+(プラス)〈神奈川県〉(vol1)
こども食堂 つき〈千葉県〉(vol1)
まぜこぜたい〈埼玉県〉(vol2)

九州・沖縄地方

本編 P6～21、P36・37

東北
宮城県石巻市

やっぺす!
ママこども食堂

親子で気楽に食事をしながら、悩み解決の場づくり

「さあ、みんなで走って見ようか」。元保育園の先生だった大山友美さんのかけ声で親子が楽しそうに体を動かしているこの場所は、NPO 法人石巻復興支援ネットワーク（通称「やっぺす」）が運営するコミュニティスペース「butterfly(バタフライ)」。「やっぺす」は石巻の方言で「一緒にやりましょう」という意味。ここでは、女性が孤立せずに子育てをしながら自立する力を育むことをめざして、就労や起業、地域復興支援などに取り組んでいます。

今日は､月２回開催される｢やっぺす！ママこども食堂｣の日。｢夫の帰りが遅く、子どもと２人で食事をしていても叱ってばかりで｣と、ある日遊びに来ていたママが悩みを打ち明けました。１人で食べることだけが孤食ではない、家族と一緒でも孤独を感じてしまうことがある。だったら、ここでみんなであたたかいものを食べようか、と親子で食べる活動が始まりました。

｢食事の用意ができました｣の声で、

遊びは一旦終了。本日のメニューは手づくりピザと手羽先の素揚げのクリスマスメニュー。｢おいしいね｣と頷きあいながら、お腹が満ちていく幸せなひととき。食事が終わるとまた遊び始めたり、大山さんとママが話をしたり、思い思いに過ごします。

｢誰でも来られて、子どもと遊んでくれる人がいる、そんな寛げる雰囲気があって初めて悩みが話せると思います。日々の暮らしに手一杯だと、悩みに気づけないこともあります｣と代表の兼子佳恵さん。｢自分が子育てをしているときに、こんな場があったらよかったな｣という思いが込められています。

また、石巻は 2011 年の東日本震災で大きな被害を受けました。さまざまな支援を受け入れる際､｢支援する・支援される｣の関係から、｢一緒につくっていく｣関係づくりが大切だと痛感したそうです。対等な関係になるには、自分たちも力をつけなければいけないと、女性の就労や起業、活躍する場づくり支援も積極的に行っています。

さらに、やっぺすは、企業と連携をして事業を展開しています (P42 参照)。企業とうまく連携するコツをお伺いすると、｢必要なものを素直に伝えています。依頼を受けてもニーズにあわなければお断りすることもあります。大きなことを１回するより、細く長く継続することで、地域に必要なものができていくと思いますので、焦らずつながりづくりをしています｣と兼子さん。

2018 年 10 月に、新拠点にお引っ越し。これまでのコミュニティスペースに加え、起業や創業する人を支援するインキュベーションオフィスや、ものづくりをしている人のチャレンジショップの準備を進めています。また、講座やイベントなどで、この場を使ってくれる人も募集しています。｢みなさんと一緒に、この場をつくり続けたい。そして、誰もが来られる場所にしたいです｣。やっぺすは、さらに大きな一歩を踏み出したところです。

運営主体
NPO 法人石巻復興支援ネットワーク
（通称「やっぺす」）
住所
宮城県石巻市開北３丁目 1-8
連絡先
TEL 0225-23-8588
e-FAX 022-774-1469
URL
http://yappesu.jp

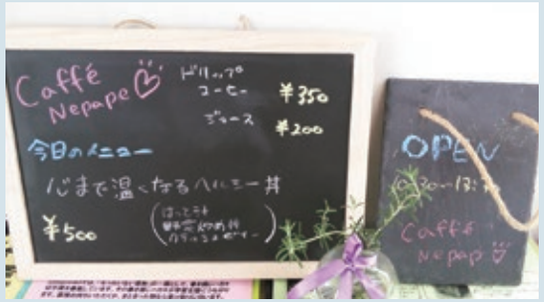
東北
宮城県大崎市

中高生が提供する Oneコインカフェ Caffè neppape

子どもの社会的な自立をめざして

「志誠塾」という拠点を構え、子どもの社会的な自立をめざして活動をしているのは、NPO 法人 Synapse40 代表の千葉繁美さん。「志誠塾」がある宮城県大崎市は、2011 年の東日本大震災で、内陸部として大きな被害を受けた地域のひとつです。「内陸部も大きな被害を受けましたが、沿岸部に比べると支援は遅れがち。このまま 20 年も経つと内陸部と沿岸部では復興に大きな差が出てしまうのではないか」という危機感を抱いていました。当時、地元中学校の校長先生をしていた千葉さんは「このままではいけない」と、教え子や保護者に呼びかけ賛同者を募り、3 年前に NPO を立ち上げました。

ここでは、子どもたちの「やりたい！したい！」気持ちを大切にして、さまざまな活動に取り組んでいます。現在、活発に進められているのは、「誰もやらない 子ども駄菓子屋プロジェクト」。地元のお祭りなどで子どもたちが駄菓子屋を出店し、そこでの売り上げを次回の駄菓子を購入する資金に当てるだけではなく、良い活動をしている団体に寄付する活動です。子どもたちの役割は、イベント当日、駄菓子を販売するだけではありません。販売前に、経済のしくみや発注の方法を学び、いくら売るかの目標を決め、販売額が目標に達しないときは、別の場所で売ることなども考えます。



こども食堂も、「誰もやらない 子ども駄菓子屋プロジェクト」と同じく、楽しく体験しながら、問題解決の手法を身につけ社会貢献する意義を学び、社会的な自立をめざした活動として始まりました。月 1 回開催される「中高生が提供する One コインカフェ Caffè neppape（ネパペ：宮城の方言で「ネッパル＝くっつく」をイタリア語風にネーミングしたもの）」は、子どもたちで献立を考え、当日は調理や接客を担当しています。お客様には、小学生のほか、ここの活動を理解してくれている地域の大人たちが食べに来ます。

閉店後の振り返りでは、メニューに凝ってしまい仕込みが大変だったが、「ありがとう」と言葉をかけられて嬉しかったなどの感想がありました。人の役に立つことが実感できると、「またやりたい」というモチベーションにつながっていきます。そんな子どもたちのやる気が育まれていく場でした。

運営主体
NPO 法人 Synapse40
住所
宮城県大崎市古川駅前大通二丁目 4-16
連絡先
TEL&FAX 0229-47-4294
URL
https://synapse40.wixsite.com/synapse40

北海道
札幌市西区

西野こども食堂 kaokao

子どもだけで安心して来られて、楽しくごはんを食べられる場

日も暮れ始める頃、１人２人…と子どもが訪れ、勝手知ったる我が家のようにボードゲームや文房具を出して思い思いの場所で過ごし始めます。ここは、静かな住宅街にある一軒家「西野こども食堂kaokao」。“顔と顔のみえるつながりの中で、子どもたちが安心して過ごし、楽しくごはんが食べられる場”をめざして、週1回開催されています。

「オープンしてみたらね、こんなに子どもが来るんだ！って、びっくりしました」と言うのは、この場所の提供者の堀川淳子さん。長年この場所で、高齢者が集う“コミュニティカフェ”を運営してきました。３年程前、仲間の１人から「子どもの居場所づくりもできないか」と相談があり、小中学校の先生や町内会の方など、地域のみなさんに挨拶をすることからはじめ、数回の準備会を経て、2016年4月に「こども食堂」をオープンしました。

「kaokaoという名前は、大人も子どもも、顔と顔がつながる場にしたいというメンバーの思いと、タイ語で“ごはん”という意味の“カオ”をかけ合わせてつけました」と、地域で子育てをしながら、運営に携わっている大下なつえさん。子どもの通う学校へチラシを設置してもらったり、子どもたちに「遊びにおいで」と声をかけたりすると、「子どもだけで行っていいの？」という反応が多かったそうです。

ここでは、決められた活動や時間割はなく、テレビや電子ゲームなどもありませんが（持ち込みもしない約束）、子どもたちは、トランプやボードゲームをしたり、本を読んだり、絵を描いたり…と、わいわい楽しそうに過ごしています。

「ごはんができたよ」と声がかかると、食べたい子どもから順に食卓につき、その時一緒にいた人たちと食卓を囲みました。この日は、「子どもたちに…」と農家からいただいた栗でつくった栗ごはん、おでん、デザートが木のお盆にのせられて運ばれてきました。食事の後は、遊びの続きをしたり、お絵描きをしたり。あたたかな雰囲気の中、大人たちに見守られながら自由に寛ぐ“子どもの時間”が流れていました。

運営主体
NPO 法人ぐるーぽ・ぴの
住所
北海道札幌市西区西野８条 9-18-67
連絡先
TEL 011-671-1443
URL
西野こども食堂 kaokao（かおかお）
毎週水曜

あさぶ商店街 麻生キッチンりあん 子ども食堂りあん

こども食堂 ぽんぽこ

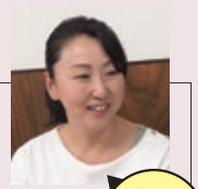
商店街で、三世代が交流できる場づくり

このまちで生まれ育った西本香奈江さん。別のまちで暮らし、３年ほど前に戻ったとき、街角で中学生がタバコを吸っている姿を見かけたのがきっかけでした。「このままではまちの治安が悪くなってしまう。何かしないと」。

そのころ、あさぶ商店街では、空き店舗活用のアイデア実現として、ひとり親世帯の子どもへの学習支援や栄養バランスのとれた食事提供をすでに行っていましたが、まちに住む誰もが来られる場づくりが必要だと「子ども食堂りあん（フランス語で“つながる”という意味）」がスタートしました。

元々商店街と町内会の結びつきが強く、教育関係者とのつながりもあることから、学校の協力が得られやすく、多くの子どもたちが遊びに来ています。

現在、さまざまな人が集まる「あさぶ発　子どもネットワーク会議」を開催し、子どもと一緒におでかけしやすい場所のマップづくりや、お困りごとの解決策を話し合ったりしています。「つながっていけば、問題は解決していけると思います」。まちの治安改善の思いから始まったこども食堂の取り組みは、さらに広がりを見せています。



西本さん

運営主体
麻生商店街振興組合
住所
北海道札幌市北区北 39 条西 5-2-12
連絡先
TEL 011-707-1795
URL
https://asabu-rian.com/about/#kodomo

親子２人きりの時間から、みんなで過ごす時間に

地元の人が足を運ぶラーメン屋さんで、「こども食堂ぽんぽこ」は活動をしています。ここは、ぽんぽこを運営する佐野久美子さんの両親のお店です。「ぽんぽこを始める３年前、私には当時１歳の子どもがいて、２人きりの時間を過ごすことが多かったです。こども食堂を知って、このような場がいっぱいできるといいな、もしかしたら自分にもできるのでは」と思うようになったそうです。

ラーメン屋なら厨房施設もあるので良いと思い立ち、両親に相談。最初は難色を示されましたが、「貸して欲しい」とお願いして 2016 年春にスタート、今では積極的に協力してくれる大切なメンバーです。食費も当初は自分で捻出しましたが、facebook で呼びかけたところ寄付が集まるようになりました。

毎週木曜日の夕方、お店の休憩時間中、３～４組の親子が来ます。「こんにちは」と静かで優しい口調で声かけをする佐野さん。「この夏初めて子どもたちと遠出をし、畑で野菜の収穫をしました。また出かけたいですね」。

親子２人きりでは得られなかった、充実した時間を過ごせる場が生まれています。

運営主体
子ども食堂 狸小路 10 丁目
住所
北海道札幌市中央区南３条西 10-1000 札幌軒内
連絡先
TEL 011-271-4139
URL
子ども食堂　ぽんぽこ ー狸小路 10 丁目

東海
名古屋市北区

あじまわいわい食堂

地区会館が場所を提供
保育士も民生委員も一緒に

名古屋市北区楠地区会館2階の調理室では、10人近いボランティアが、この日の献立、キーマカレーとサラダづくりの真っ最中でした。地区の民生委員もいれば、北医療生協の職員、地元の保育園の保育士さんらの混成部隊です。

8月の土曜日、あじまわいわい食堂を訪ねました。「みんなでやることにこだわっています」と、わいわい子ども食堂プロジェクト運営委員長の杉崎伊津子さんは話します。「あじま食堂」に先立ちできた、わいわい子ども食堂は、愛知県北部を中心に病院や介護老人保健施設などを運営している北医療生協、名古屋北法律事務所友の会、めいほく保育園を運営する名北福祉会の3者のプロジェクトとして始まりました。杉崎さんは同生協で子育て支援活動をしていましたが、こども食堂のことを知り、2015年6月に東京・豊島区のこども食堂を見学、半年後の11月には、生協の事務局がある北区上飯田のビル2階でこども食堂を始めました。

さらに活動を拡げようと場所探しをしていたところ、社協が楠地区会館につないでくれたそうです。同会館では、老々夫婦や一人暮らしの高齢者らを対象とした給食会を、市の委託事業で年4回開催していました。館長の長瀬由子さんは「子ども向けにも何かしたい、という思いはあった」と話します。こども食堂開催のため、格安の利用料で定期的な場所を確保し、冷蔵庫や炊飯器などの設備を提供しているほか、長瀬さんの人脈で地元の民生委員もスタッフとして参加してくれています。

こうして、「あじま食堂」も18年4月からスタート。現在、上飯田で水曜夕方、あじまでその週の土曜昼に月1回開催しています。二つの食堂は寄付された食材を融通し合っているほか、あじまの運営員会には長瀬館長や民生委員も出席しています。食堂を開いた後は、「わいわい子ども食堂」通信

「わいわいあじま食堂」通信（いずれもA4判2ページ）を発行し、情報共有を図っています。こんなところにも、杉崎さんの「みんなが参加してやる」ことへのこだわりがうかがえます。

ともに子どもは無料、大人は300円。8月にあじま食堂を訪ねたときは連日の猛暑の影響か、子ども44人を含め70人ほどの利用者でしたが、普段は100人を超える子どもが利用するそうです。

運営主体
わいわい子ども食堂プロジェクト
住所
愛知県名古屋市北区楠味鋺３丁目612番地　楠地区会館内
連絡先
TEL 052-914-4554
北医療生協組織課
URL
わいわい子ども食堂

東海
名古屋市昭和区

つなぐ子ども食堂

育児休業中に塾借りて開始
地域がつながるきっかけに

高い天井の体育館に青いシートを敷き、長机を2つ合わせて作ったテーブルが8個並びます。名古屋市はこの日も35度を超える猛暑でしたが、館内は幾分かは過ごしやすいです。夏休みも終わりが近い8月の月曜日の昼、つなぐ子ども食堂 in 吹上小が開かれました。

校庭から階段で登ってこられる入り口には、受付のテーブル。受付役は桜花学園高校の2年生2人がボランティアで担います。午前10時過ぎ、体育館と廊下で行き来できる家庭科実習室では、ボランティアのお母さん、おばあちゃんたちと子どもたちが一緒になって、調理が始まっていました。この日の献立は、中華丼に、トウモロコシと玉ねぎのスープ、ジャガイモきんぴら、梨サラダ。幼稚園年長さんの女の子２人が、エプロンに頭巾姿で梨を切るのを手伝っていました。

つなぐ子ども食堂を主催する「つなぐ子ども未来」代表の安藤綾乃さんが、こども食堂を始めたのは、17年

夏。育児を地域のみんなが見守る場があれば良いと考え、新聞で読んで関心があったこども食堂を自分で始めよう、と思い立ったそうです。2児の母親で当時は育児休業中。場所がなかったので、上の子が通っていたそろばん塾を借りて始めました。その後、近くのお寺がスペースを貸してくれるようになりました。だんだん認知度が上がって、来る子どもが増え、お寺に迷惑をかけそうになったので、区内を移動しながら場所を探して、こども食堂を開くことにしたそうです。昭和区に11ある小学校区ごとに月1回開くことを目標にしました。

地域を回って見えてきたことがあるといいます。訪ねていく自分たちが、その地域の人たちと会うのが初めてなのは当然なのですが、そこに住む人たちも、お互いのことを意外に知らないのだそうです。こども食堂が、近所にどんな大人や子どもが住んでいるのかを知る良いきっかけになっていました。

安藤さんには忘れられないことがあります。最初のころ、あるお年寄りが食堂に来てくれたので、今度は受付でも頼もうと思って訪ねていくと、数日前に亡くなっていたそうです。1人暮らしでした。「もう少し早く来ていれば…」と思うと同時に、「そんなつながりが地域にできていれば、お年寄りの孤独死も防げるのでは」とも思いました。「自分が住む地域に関心を向ける人が１人でも増えればいい」。そのきっかけになるコニュニティーの場として、こども食堂を続けたいと思っています。

安藤さん

運営主体
つなぐ
子ども未来：
ボランティアグループ

住所
愛知県名古屋市昭和区に 11 ある小学校区内で巡回

連絡先
TEL 090-3953-2561

URL
https://www.facebook.com/tunagu.kodomo.mirai/

九州
宮崎市曽師町
みやこや

共生型の地域福祉見すえる
祖母世代が教える菓子作り

「みやこや」は、代表の長友宮子さんが親と同居していた自宅の一階を改築して事業所にしています。柱は食のサービスで、お年寄りや子ども向けに自宅に食事を届ける宅食サービス、腎臓病食も含めた病食にも対応しています。

長友さんの視線は、自宅がある曽師町を単位とした地域福祉の仕組みづくりに向いています。「高校生のとき介護保険制度が始まり、これからは在宅介護の時代だ、と思った」と長友さんは話します。祖父が郷土料理研究家でもともと「食」にも関心があり、食と福祉で何かやろうと思ったといいます。栄養士の資格を取ったうえで食品会社から福祉施設に転職。自分の子育てがきっかけとなり子育て支援の団体を作りました。そうした経歴と自らの思いを、自宅を拠点に一つ一つ形にしているのが「みやこや」だと言えます。宅食サービスやデイホームに加え、17年７月からこども食堂を始めました。

デイホームのような介護予防の「通いの場」と、子どもの「居場所づくり」を融合させた共生型事業は、地域住民が「我が事」として地域づくりを育む仕組みとして、厚労省が推奨するモデルです。長友さんにとってこども食堂は「地域コミュニティーづくりのツール」なのです。地域のことが分からないとサービスができない、と民生委員にもなりました。

こども食堂の開催は月１回。小学生を中心に 15 人くらい子どもが参加するといいます。特徴は食事の前に子どもたちと一緒にお菓子作りをすることです。子どもたちのリクエストで作るお菓子を決めます。自分が食べたいものですから、子どもたちも一生懸命に手伝って、盛り上がるそうです。最初「マカロン」と言われて、作り方が分からず困ったこともあるそうですが、チョココロネやマルボーロなどを一からつくります。おばあちゃん世代が今どきのお菓子でもつくり方を知っていて、喜んで教えてくれるそうです。

長友さんはネットワークづくりにも意欲的です。「広がれ！こども食堂の輪　全国ツアー」のシンポジウム（宮崎は 17 年１月開催）のため県の補助を受け、「こども食堂を基盤としたネットワーク事業」を始めました。そのとき立ち上げた連絡会議の事務局を今も務め、ＪＡや企業を巻き込んだコラボ事業に取り組んでいるそうです。

運営主体
デイサービス＆町の惣菜や
みやこや
住所
宮崎県宮崎市曽師町 111 番地３
連絡先
TEL 0985-24-9579
URL
デイサービス＆町の惣菜や
みやこや

こども食堂を支援する取り組み

JAの支援 ～地域により多様な形態～

コメの保管、有り難かった

宮崎県日向市でこども食堂「こども食堂ひゅうが絆」を運営している、三輪邦彦さんは、17年4月から食堂を始めるにあたってまず、関係団体に協力を要請して回ったそうです。その一つがＪＡでした。

JAからの返答は、「コメはJAとして寄付するのは難しい。野菜なら地元のJA直売所に聞いてみてください」でした。さっそく近くのＪＡ日向八菜館を訪ねたところ、高校のときの教え子が店長をしていました。そう、三輪さんは元高校教諭だったのです。野菜は生鮮食品ですので、その日売れ残った野菜を提供してくれることになりました。さらに、コメの保管も店の保冷庫を使わせてもらえることになりました。コメは、個別に農家からの寄付があったそうです。野菜の提供だけでなくこのコメの保管も「とても有難かった」と言います。保冷庫は買ったら数十万円する品物。預かってもらえるおかげで、せっかくいただいたコメを無駄にすることがなくなりました。

JA宮崎中央会に聞きますと、県内13JAのうち、こども食堂と連携しているのは18年10月現在、3JA（児湯、延岡、日向）となっています。中央会としては、「食」と「農」を通じた地域貢献活動として、こども食堂との連携を進めたいそうですが、「新しい取り組みのため、環境づくりに時間がかかるJAもあるので、少しずつ取り組みの輪を広げていきたい」（農業振興部）としています。

食材費を全額支援

JAながの（長野市）の取り組みはユニークです。長野県では子どもたちに食事や学習の機会を提供する「信州こどもカフェ・こども食堂」事業を17年度から始めました。JAながのは、県内単位JAとして初めて県と連携し、「JAながのこどもみらい基金」を設立。地産地消の拡大などの観点から、管内のこども食堂などを食材支援しています。

具体的仕組みはこうです。こども食堂関係者がJAながのの直売所やAコープでこども食堂のための食材を買い、その領収書を認定NPO法人長野県みらい基金を通してJAながのに送ると、食材費が全額支援されるのです。

地元の旬な野菜、肉などにも使えるので食堂関係者にとても好評だといいます。

さらに清泉女学院大・同短大が運営するこども食堂「丘の上レストラン清泉」への食材支援を通じて、同大と17年度に包括連携協定を結びました。こども食堂支援にとどまらず、学生に実地研修の場を提供。インターンシップを受け入れたり、販促イベントで地元農産品のPRをしてもらったりしています。JAながのは「こども食堂支援をきっかけに広がった連携の輪だ」と評価しています。

支援のJA、1年で急増

JA共済総合研究所の主任研究員福田いずみさんによると、17年10月末時点で、13都府県19JAが子ども食堂への食材提供を実施していました。それが1年後の18年10月末時点では、25都道府県54JAに増えているそうです。これは福田さんが調べた範囲の数字ですが、今もこども食堂へのJAの支援は広がっているといいます。

支援だけでなく、こども食堂を自分たちで始めるJAも現れました。JA南国市（現・JA高知県）は18年5月から月1回、JA富士市（静岡県）は同6月からやはり月1回、2か所で食堂を始めました。場所、スタッフ、食材が確保しやすいのが強みだそうです。

日本農業新聞によると、JAグループ北海道は、札幌市内のこども食堂を支援するため、サッカーJ1・北海道コンサドーレ札幌、北海道教育大、北海道教委と連携したモデル事業を18年に始めました。JAさっぽろが新米や玉ねぎを市内のこども食堂「もくきち」に提供しています。

JAだけでなく他の組織、企業を巻き込んだ支援は、全国各地で広がっているようです。最初に紹介した宮崎県日向市でも、こども食堂ひゅうが絆を起点とした支援の輪が広がっています。イオン日向店フードコートの飲食店4店が500円の食事券を無料でこども食堂に来る子どもたちに配ったり、九州電力日向営業所が所内の調理コーナーを開放して、2か月に1回、希望する家族を対象にした調理教室を開いたりしているそうです。

JAながのが支援するこども食堂の様子

企業の支援

交流を大切にする大企業の支援

「明日の段取りを確認しましょう」と打ち合わせを始めたのは、日清製粉グループ本社でCSRを担当している石森昌子さん。料理教室「おやこDeふれあいキッチン♡」の支援で東京から石巻に出張してきました。この料理教室は、「やっぺす！ママこども食堂」(P24-25参照)と同じく、NPO法人石巻復興支援ネットワーク（通称：やっぺす）が取り組んでいるママ・子ども支援事業の一つです。

東日本大震災以降、日清製粉グループでは企業理念「健康で豊かな生活づくりに貢献する」に基づき復興支援活動に取り組んでいます。その支援の特徴は、資金や食材の提供だけでなく、「交流」を大切にしている点です。

今回の料理教室も、「親子で楽しむ場にしたい」「地元の食材を使って欲しい」という主催団体の意向を尊重した企画です。前日には最終確認の後、買い出し。当日は朝から準備、開始後は参加者のサポートから片付け、終了後は反省会と次回の企画の打ち合わせと、料理研究家と一緒にフル稼働。

このほか、ボランティアを募り被災地に行ったり、被災地産品を社内販売したりなど、地元の声を社員に直接伝える機会もつくっています。

フットワーク軽く連絡できる関係づくり

「明日、食材をお持ちしたいのですが、ご都合いかがでしょうか」。東京都大田区でこども食堂だんだんを運営する近藤博子さんに電話をかけてきたのは、同じく大田区内で学校給食の食材卸業を営む「黒光商事株式会社」に勤務する近藤裕二さん。「小学校が長期休みに入るとき、使い切れなかった食材がある場合のみですが、ご連絡しています。子どもたちが毎日給食で食べている食材なので、こども食堂で使ってもらえるのはありがたいです」。

食材卸会社とだんだんは、フードロスの問題に関心があり、日頃からだんだんを応援してくれている区議の方のマッチングによりつながりました。

12月後半の終業式の日、大根、ジャガイモ、みかんなどの野菜や果物、可愛らしい箱に入ったミニクリスマスケーキなどが、だんだんに届きました。「立派なお野菜です」と笑顔の近藤博子さん。ここだけでは使い切れないと、すぐに笑顔ミーティングという子ども関連の活動をしているネットワークメンバーにお知らせしたところ、「欲しい」団体だけでなく、「持っていきます」という人も現れました。また、区内のこども食堂ネットワークメンバーにもお持ちしたところ、「とても助かります」と感謝されました。

会社としては、個別に配達するのは大変ですが、だんだんのような拠点1箇所に持っていくのなら寄付もしやすくなります。寄付を受ける側も、食材を分配するネットワークがあるからこそ受け取れる、そんな無理なく続けていける関係づくりができていました。

こども食堂を応援している企業

こども食堂の取り組みを、
さまざまな形で応援している
企業が増えています。
ここでは、その一部をご紹介します。
今後このような企業の応援が、
ますます増えていくことを
願っています。

株式会社 ハローズ

中部四国地方で展開しているスーパーマーケットハローズでは、ラベルの汚れなどで廃棄せざるを得ない商品に対して、従業員より「もったいない」の声があがっていました。そこで、2015 年よりフードバンクへ食品提供を始め廃棄率も下がりましたが、提供量の増加に伴いフードバンクの負担が大きくなっていきました。

ハローズモデル

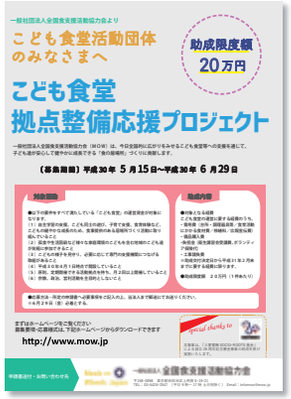
そこで、2017 年 12 月より、近隣の店舗から支援団体へ直接提供する仕組み「ハローズモデル」へと運用を切り替えました。この取り組みは、「第 6 回食品産業もったいない大賞『農林水産省食料産業局長賞』」を受賞しました。

https://www.halows.com/files/uploads/news/1545529482_pdf_346.pdf

三菱電機 SOCIO-ROOTS（ソシオルーツ）基金

1992 年、ある社員の申し出をきっかけに、この基金は立ち上がりました。社員から寄付を集め、それと同額を会社が上乗せした基金から、社会福祉施設や団体に寄付をしています。

2017 年には、基金設立 25 周年記念事業として「こども食堂 拠点整備応援プロジェクト」を実施する一般社団法人全国食支援活動協力会へ寄付を行いました。このプロジェクトでは、公募により選定した団体へ、拠点が継続していくために使われる資金を助成しました。



基金設立 25 周年
記念事業チラシ

http://www.mitsubishielectric.co.jp/news/2018/0328-a.html
三菱電機 SOCIO-ROOTS（ソシオルーツ）基金

ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ

ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、「我が信条 (Our Credo)」の理念に基づき「地域社会に対する責任」を果たすため、グループ有志社員により「社会貢献委員会」を結成しています。そして地域に密着したパートナーとの協働で、からだやこころの健康をテーマとしたさまざまな支援への取り組みを実践しています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン ホームページより

2016 年度の子どもをテーマとした助成プロジェクトの 1 つに、「フードバンク事業と子ども食堂との連携モデル構築（認定特定非営利活動法人フードバンク関西）」が採択されました。３年間かけて、持続可能な両者の連携モデルを構築し、そのノウハウを全国に展開していくことを応援しました。

https://www.jnj.co.jp/our-societal-impact

一般財団法人 キユーピーみらいたまご財団

「食を通じて社会に貢献する」ことを目的に、2017 年に設立されました。「食育活動」「食を通した居場所づくり支援」をテーマに活動する団体へ寄付を中心とした助成活動を行います。2019 年度から、こども食堂などの活動の立ち上げから定着までを支援する「スタートアップ助成金」を新設しました。また、こうした活動団体の学びや交流の場を提供するセミナーも開催しています。

毎年 10 月に次年度の助成募集要項を発表し公募をスタート、翌年の 4 月に助成金を交付します。また、キユーピーグループの社員がボランティアで助成団体の活動に参加し、食を取り巻く社会課題に向き合い、その解決への取り組みを学んでいます。

http://www.kewpiemiraitamagozaidan.or.jp

公益財団法人 キリン福祉財団

国際障害者年にあたる 1981 年に、キリンビール株式会社創立 75 周年を記念し福祉目的専門の財団として設立されました。

キリングループは、CSV を土台に据えてお客様のことを一番考える会社として、地域に貢献して、地域を元気に、地域とともに成長していくことをめざしています。

キリン福祉財団は、キリングループとともに「キリンは飲みもので、財団は福祉で『地域を元気に』」をテーマに、「地域を元気にする」さまざまな福祉の取り組みに助成をしています。

こども食堂に集まる子どもたちのために、食品衛生の基礎知識を記載した『こども食堂あんしん手帖』（一般社団法人全国食支援協力会）の作成や、こども食堂の理念やノウハウの普及のための全国集会を行う『子ども食堂を、プラットホームに』プロジェクト全国研修会（ＮＰＯ法人豊島子どもＷＡＫＵＷＡＫＵネットワーク）などの事業に助成をしています。

https://www.kirinholdings.co.jp/foundation/

アサヒ飲料株式会社

アサヒ飲料では、子どもたちの健やかな成長を願い「こどもたちの明るい未来づくり基金」を創設し、こども食堂を支援しています。

基幹ブランド商品「三ツ矢サイダー」と「カルピス」を各々の記念日に社員が店頭販売し、その売り上げの一部を「赤い羽根福祉募金」を通じて、全国のこども食堂に寄付しています。

また、子どもの居場所を広げ、支えるために、「食でつながるフェスタ」など、活動団体・自治体・企業などが連携して取り組みを推進するための助成も行なっています。

「こどもたちの明るい未来づくり基金」ポスター

https://www.asahiinryo.co.jp/company/newsrelease/2018/pick_0719_2.html

YAHOO! ネット募金

社会問題などを解決するためのプロジェクトを応援するため、インターネット上で募金ができるしくみです。「災害・復興支援」「子ども」「動物・ペット」「国際協力」「医療・福祉」「その他」のテーマに分かれています。

YAHOO! ネット募金より

こども食堂関連では、こども食堂の保険加入を勧める「こども食堂安心・安全プロジェクト（プロジェクトオーナー：こども食堂安心・安全向上委員会）」や、こども食堂を継続して支援するための仕組みとして、「広がれ、こども食堂の輪！推進会議」の運営を支援する「子どもたちに、安心して過ごせる温かな居場所を～冬休み『こども食堂月間』プロジェクト～」（プロジェクトオーナー：中央共同募金会）」などがあります。

https://donation.yahoo.co.jp/detail/341019/

ネットワークの必要性

～つながること との大切さ、中間支援の意義 を共有しよう～

寄付の受け皿として

中京大現代社会学部の**成元哲教授**が、こども食堂のネットワークを立ち上げたのは、ひょんなきっかけでした。

受け持っている大学ゼミのフィールドワーク対象として、新たに「こども食堂」をテーマにしたのが 2016 年度のこと。当初こども食堂は、愛知県内に 10 か所程度しかありませんでしたが、学生が調査を始めたころからどんどん増え始め、年度末には 30 数か所になっていました。それに応じて社会の注目度も上がり、北医療生協が開いた勉強会で、学生がこども食堂の調査について発表したところ、そのことがマスコミに紹介されました。

それ以来、こども食堂に関する問い合わせが大学の研究室に来るようになったそうです。「東海地区のなるべく多くのこども食堂に寄付をしたい」という酒類卸会社「マルト水谷」（愛知県春日井市）からの申し出も、その一つでした。同社は、酒を卸している参加店舗で売れた生ビール１リットルにつき１円を寄付するチャリティキャンペーンを社会貢献活動として行っています。そこで集まったお金の寄付先についての相談だったのです。こども食堂は行政の制度には組み込まれておらず、自然発生的に生まれた食堂が多いため、どこにどれだけの食堂があるのか把握しているところがなかったのです。成さんはそのとき、愛知県内のこども食堂マップづくりを進めていたため、同社からの寄付金の窓口役を引き受けました。

こうした寄付の申し出はこれからも増えるだろうから、と北医療生協でこども食堂をやっていた**杉崎伊津子さん**らに提案。17 年 6 月に「あいち子ども食堂ネットワーク」を立ち上げました。しかし、「窓口」になることの忙しさは想像以上だったといいます。食堂をやっている人、始めたい人、マスコミ、寄付をしたい人・企業…。実にさまざまな問い合わせが来ました。ネットワークとして公表している電話，FAX、メールの対応に多くの時間を割くようになり、本来の研究の仕事に支障をきたすようになりました。それでも 1 年間は「頑張って続けた」と言います。

配分方法に悩む

もう一つ悩みの種だったのが、寄付金や提供された食材の分配の仕方です。ネットワークに入っているかどうかとは別に、愛知県内、名古屋市内の食堂マップをつくっていましたが、リストアップでもれる食堂が必ず出てきます。数が急速に増えている時期でしたからなおさらです。また食材の場合、まずネットワークの幹事である 10 食堂でもらい、うまくいくと分かったら広げていこう、というルールを決めていましたが、そのルールを知らない食堂から見ると、不信感を呼ぶやり方だったようです。

大学との関係もあり、これ以上ネットワーク業務は続けられなくなり、18 年 6 月に、北医療生協などを母体に 2 つのこども食堂を運営している杉崎さんに事務局を引き継いでもらうことになりました。

寄付金や食材提供の受け皿としてだけでなく、食堂間の情報交換、スキルアップのための研修、行政やマスコミ相手の対応窓口など、ネットワークの必要性は間違いなくあります。しかし、「経験上、専従者が何人かいないととてもフォローできないし、人件費も含めて年 2 千万円くらいかけないと必要な業務はこなせない。そうしたことを国や県・市町村、企業や中間支援団体などの支援者側に理解してもらわないといけない」と成さんは訴えます。

事務局を引き継いだ杉崎さんも、ネットワークのあり方については模索中です。「成さんが 1 年間事務局をやってくれたのは非常に大きかった。これからは食堂間の横の連携を強化したい」と話します。

まずは食堂同士がつながる

こども食堂は、子どもに対して思いのある個人や団体が始めた、民間主導の活動です。18 年 6 月に厚労省が都道府県・指定市・中核市宛に出した通知「子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について」で、初めて政府の公文書の中に位置づけられましたが、国レベルの法令上の位置づけはありません。ですから、ネットワークづくりも食堂運営者主導の動きが先行しました。

しかし、思いのある人たちの活動だからこそ、めざす方向や思い描くプロセスが一致するとは限りません。ネットワークについても、「行政や企業などいろいろなところとつながろうとするのは良いことばかりではない。対象にならないところ、やりたいことと合わないところからの不公平感を生んでいる」との意見もあります。それでも、つながることは必要だと、各地で模索が続いています。

2012年、全国でも最も早くから大阪市西成区で「にしなり☆こども食堂」を始めた**川辺康子さん**は「ネットワークはゆるいつがなりで良い」と考えます。現在代表を務める「こども食堂ネットワーク関西」は、他の食堂からの問い合わせ、支援の申し出、ボランティア希望などが増えてきたのがきっかけで16年に立ち上げました。当時18団体でしたが18年12月現在52団体に増えました。「集まれば集まるほどいろんな意見が出てきて、続けていくのが難しくなる。でも大阪はいろいろ思うところはあっても『まあ、かまへんやん』と言って丸く収められる雰囲気がある」と言います。

「居場所は人と人とのつながり。それは、ネットワークも同じだと思います。食堂同士が交流し、他のネットワークとつながって、また成長していくのではないでしょうか」

自治体の支援はさまざま

一方、こども食堂の数がこれだけ増えてくると、公的な組織もその役割を果たすことが求められてきます。自治体や社会福祉協議会などの公的な組織が、こども食堂のネットワークにどうかかわるかは、地域の実情にもより千差万別のようです。

鳥取県の場合、「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー」のシンポジウムを開催した実行組織を母体に2017年11月、「とっとり子ども未来サポートネットワーク」が設立されました。県が人件費を含めて年500万円出し、事務局を置くNPO法人が専従職員1人を配置しています。県によると、設立当時21か所だったこども食堂が、1年後の18年11月には42か所に倍増したそうです。食材提供の動きも広がっています。米子市を中心とした県西部地域では、月1回、県生協の商品配送拠点を借りて、スーパーなどが提供してくれる食材を各食堂運営者に配る会合が定例化しています。同時に食堂同士の情報交換・交流会の場ともなっているそうです。県東部地域でも、同様の食材提供・交流会が18年12月から始まりました。県東部にある鳥取市は、「地域食堂」という位置づけでこども食堂に補助金を出し、市域のネットワークの事務局として支援団体や企業との仲介もしています。また県東部の郡部にも広がっているこども食堂のために、県ネットワークと役割分担し、重層的に取り組んでいるといいます。

県ネットワークの事務局はそうした食材分配や寄付のとりまとめなどの業務を担い、県や県生協、県社協、NPO支援機関がそれぞれの強みを生かし、一緒に活動していますが、応援する企業側から「ネットワークの活動が見えてこない」という意見が出るといいます。ネットワークの活動実態を知ってもらう情報発信も必要だ、と感じているそうです。

首都圏でも積極的に取り組んでいる自治体はあります。埼玉県は18年11月26日、さいたま市の大宮ソニックシティで「こども食堂フォーラム～広げよう！ こどもの居場所～」という県主催のイベントを開き、約700人を集めました。こども食堂のほか、プレーパーク、学習支援、企業・団体など43団体がパネル展示で参加しました。「顔の見える関係をつくってつながりを広げたい」という趣旨。19年1月31日には県西部の川越市で分科会討議を中心としたフォーラムを開きました。

さらに18年12月に、「こども応援ネットワーク埼玉」というネットワーク組織を立ち上げました。「社会全体で子どもを応援していく機運を盛り上げたい」（県福祉部）と考えています。県がネットワーク事務局を担うそうです。

「地域社会で大切な取り組み」

「奈良こども食堂ネットワーク」は、奈良県社協と奈良県生協連が事務局を務めています。17年8月に立ち上げ、現在40団体が入っています。もともと個々の食堂が「元気で続けていける」ことを最優先に、情報交換の場や、こども食堂への理解を広げる啓発に取り組んできました。18年からはこども食堂立ち上げ講座をネットワークとして開催し、新しく始める人を応援する活動も始めました。

社会福祉協議会の場合、地域福祉活動全般を支援する使命を担っています。奈良県社協も当然、それを承知の上で「地域社会の中でこども食堂という活動は大切な取り組みだ」という認識を持って、取り組んでいるといいます。担当者は「さまざまなボランティア活動の立ち上げ支援は社協の本来業務。こども食堂支援もその延長線上だと考えている。私たちは意欲がある皆さんの背中を押しているだけです」と話します。

ネットワークの立ち上げ時、会員となる条件を三つだけ決めました。①子どもがいる活動 ②食の提供をする ③活動の名称は問わない（「こども食堂」

と名乗らなくてもいい)、の三つです。お年寄りも来られる多世代型、コミュニティー型、多様な居場所を広げよう、という趣旨だそうです。

「公」の機能・関与は必要

宮城県ではいち早く16年からこども食堂を始めた、せんだいこども食堂代表の**門間尚子さん**は今、ネットワークづくりに力を注いでいます。食堂を始めた直後から自分たちでこども食堂の立ち上げ講座を開催。17年6月には全国ツアーのシンポジウムで実行委員会の中心メンバーとなり、県の事業としてNPOや県社協などと協力して県内各地で立ち上げ講座を続けました。そこから始まった食堂は10を超えるといいます。

県内の食堂からのさまざまな相談事、支援したい企業からの問い合わせなどは、どうしてもせんだいこども食堂に集中します。食堂は3か所で開いていて、コアのスタッフが約10人いますが、門間さんをはじめみな有職者です。「各方面からの相談への対応は仕事が終わった後。一日平均3～5時間ほどを費やします。そんな状況からネットワークの必要性を強く感じるようになった」と話します。

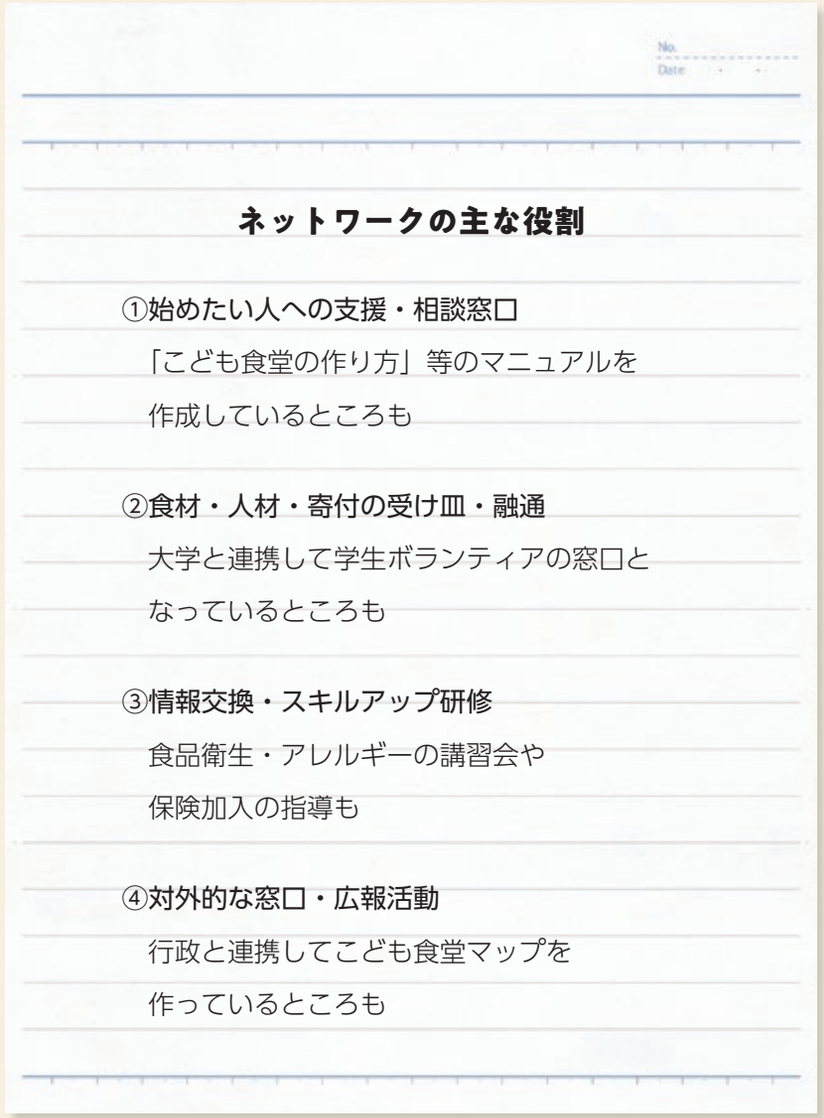
これまでもNPO活動に携わった経験がある門間さんは、こう考えているそうです。ネットワークの事務局をどこに置くのか。どのような機能が必要なのか。子どもの支援はそれぞれの食堂だけによるのではなく、民の組織はもちろんのこと、学校を含めた公の関与がどうしても必要になる。だから、「お互いに対等で専門性を持った、公と民の新しいタッグの組み方を模索したい」。

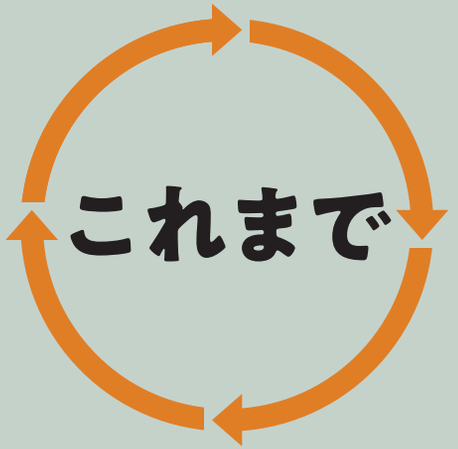
東京都荒川区では17年、官民共同の「あらかわ子ども応援ネットワーク」が立ち上がりました。最初は中学・高校生を対象にした学習支援・居場所事業でしたが、そのうちこども食堂の支援も始まり、ネットワークにしたそうです。

区社協のボランティアセンターが事務局になっています。同センターの**鈴木訪子さん**は「地域社会で子どもを支える」がネットワークのポリシーだと話します。食材の仲介から要支援家庭を公的機関につなぐ役割まで、食堂の支援を幅広くこなします。でもこうした中間支援活動は、それにかかわる人も、金も、場所も必要です。最近は寄付される食材がとても多く、ボランティアセンターが食材倉庫のようになっているそうです。

「中間支援の必要性やそれにかかるコスト（人・金・モノ）について自治体や企業に理解していただき、支援がほしい」。成さんと同様、鈴木さんもそう考えます。「民間の中間支援組織が活動しやすい環境づくりを自治体が考えてほしい」と望んでいます。

全国でこども食堂の活動が広がり、続いていくためには、食堂の運営者を理解し、支えていく中間支援組織が必要です。そのことを広く、粘り強く訴えていかなければならないのではないでしょうか。





支援団体へ広がり
公文書にも登場

- 2016.9 東京でキックオフイベントを開催
- 2016.11 推進委員会を発足
- 2017.12 中間報告会
- 2018.6 厚生労働省がこども食堂を通知文書に
- 2018.8 こども食堂あんしん手帖テキスト作成
- 2018.12 こども食堂月間

「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー」は、2016年9月に東京で開いたキックオフイベントを皮切りに、全国各都道府県（北海道を４地区に分け計50か所）でイベントを開くことを目標にスタート。３年目となる18年度中に、全50か所で実行委員会形式によるシンポジウムが実施されました（50番目となる富山県は19年2月に開催）。全国ツアー実行委員会は18年12月を「こども食堂月間」として、各地の食堂に写真の投稿を呼びかけ、全国に2千カ所以上広がったこども食堂の輪を、SNS上で目に見える形で示しました。当初の目標を果たし、18年度末をもって解散します。

「一部の人たちの取り組み」から「地域住民の誰もが理解しかかわっていける取り組み」へと、こども食堂の活動の輪を広げていくのが全国ツアーの狙いでした。それを踏まえ、子どもを見守る趣旨を同じくする福祉、教育、まちづくりなど多分野の活動経験者、識者に呼びかけて推進委員会を16年11月に発足させました。こども食堂にかかわる情報共有・学習のため会議を定期的に開催。啓発のためのガイドブックを作成・配布し、自治体や社協だけでなく民生・児童委員など子どもを見守る関係機関への働きかけを続けました。

その一環で、大阪、香川、山梨などでは、子どもからお年寄りまで食支援活動をしている幅広い団体の交流をめざした「食でつながるフェスタ」のイベントが開かれ、こども食堂が中心的な議題となりました。「子どもの居場所づくり」を共通項に、こども食堂実施者だけでなく、幅広い子ども支援団体、関係機関と手を結ぶ方向性が確認できました。母子支援施設や老人ホームなどの福祉施設で、こども食堂や食を通じた居場所づくりに取り組むところが増えてきています。大阪、香川、山梨では食でつながるフェスタのイベントが複数回開かれ、愛知や宮崎、神奈川へも開催の輪が広がっています。

全国ツアーの3年間は、国や自治体の理解が浸透してきた期間でもありました。特に18年6月に厚生労働省が都道府県知事、指定市・中核市市長あてに出した「子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について」（通知）の文書は、こども食堂を「子どもの食育や居場所づくりにとどまらず、…地域共生社会の実現に向けて大きな役割を果たすことが期待されます」と位置づけた点で、画期的なものでした。文書の中では、実行委員会がつくった活動ガイドブックも紹介されました。文部科学省も翌7月に「子ども食堂の活動に関する福祉部局との連携について」（通知）との文書を都道府県知事・教育長、指定市市長・教育長などに出しました。現場ではこども食堂と学校との連携が課題になっている例が多く、学校側の理解を促す後押しになったとの声が聞かれました。

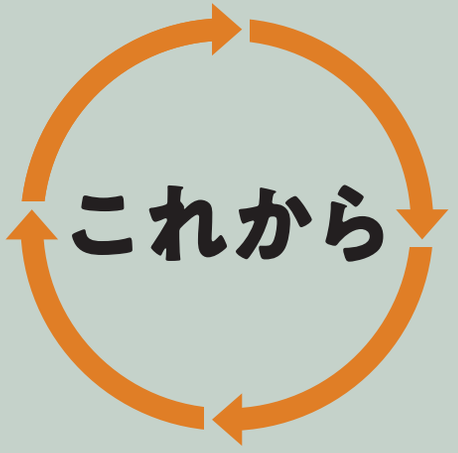
厚労省の文書では、食品安全管理が運営上の留意点として指摘されましたが、推進委員会は同年8月、「こども食堂あんしん手帖」と題したテキストを作成。食品衛生やアレルギー、食育についての基礎知識を盛り込み、全国各地の研修会で活用されています。

2019.1
facebook立ち上げ

2019.2
富山県で50回目の
シンポジウム

2019.春
広がれ、こども食堂の輪！
推進会議発足予定

新たな支援組織を立ち上げ



全国ツアー実行委員会・推進委員会は18年度末をもって解散しますが、全国各地に生まれたこども食堂の活動をこれからも続けていくためには、まだまだたくさんの課題があります。こども食堂が安心できる地域の居場所として力を発揮できるよう、公私を交えた多様な機関が支える仕組みを構築することで、運営基盤を強化し、取り組みを地域社会に定着させることをめざして、新たな中間支援組織を立ち上げます。18年秋から、実行委員会・推進委員会メンバーのほか、各地のこども食堂ネットワーク、生協、助成団体・企業などに呼びかけ、19年春には「広がれ、こども食堂の輪！推進会議」を発足させます。

推進会議として、①全国ツアーや食でつながるフェスタのようなイベント開催支援　②子ども支援の各種団体・機関への情報提供、といったこれまでの機能を引き継ぐとともに、「こども食堂サポートセンター」を立ち上げます（図参照）。サポートセンターは①相談・情報提供窓口の設置　②各地のネットワーク形成支援　③寄付物品の提供・マッチング、といった活動を行いたいと考えています。そのほか個別にプロジェクト部会を立ち上げ、機動的に運営していこうと計画しています。

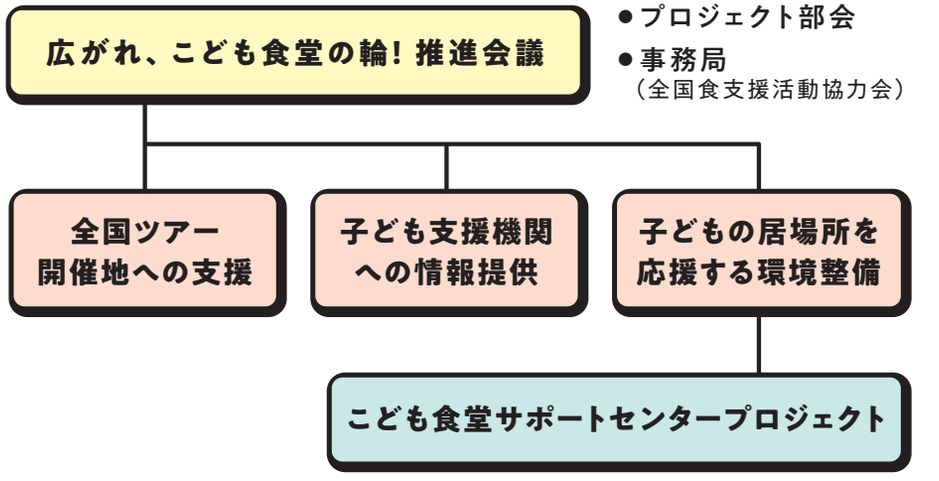
サポートセンターでは、全国のこども食堂・ネットワークを結ぶとともに、こども食堂を含めて居場所づくり活動をしているさまざまな団体をつなぐことで、安定・継続的な運営を支えることをめざします。このためホームページを開設して、イベントや研修会などの情報発信、寄付・助成の情報共有、団体間の情報交流の場として活用する方針です。ホームページは19年3月に立ち上げ、徐々に内容を充実させていく予定です。

URL http://kodomosyokudo.mow.jp/

「こども食堂サポートセンター」
https://www.facebook.com/kodomoshokudo.supportcenter/

サポートセンターの設置・運営資金として、上記ホームページへの広告支援を広く企業・助成団体に呼びかけています。問い合わせ先は、一般社団法人全国食支援活動協力会（TEL03-5426-2547　infomow@mow.jp）まで。

推進会議では、こども食堂を安心して続けていくため、政府・自治体・教育機関・社協などとの連携も重視します。そうした機関と情報を共有し、研修などによる運営者のスキルアップにつなげる並走型サポートを充実させたいと考えています。



Message
メッセージ

28年間、毎日お昼ご飯を一緒につくって一緒に食べてきた

子どもたちから”にしやん”と呼ばれている西野さん

認定NPO法人フリースペースたまりば
代表 西野博之さん

自分の責任で自由に遊ぶ「川崎市子ども夢パーク」と、その中にある子ども・若者のたまりば「フリースペースえん」を運営している、認定NPO法人フリースペースたまりば代表の西野博之さんにお話をうかがいました。

「川崎市子ども夢パーク」は、
2003年7月23日にオープンしたので、
今年で満16年。
当時12歳だとしたら、28歳。
中学生だったら、30歳になっている。
30歳っていったら、立派な大人ですよね。

昔、遊びに来ていた子どもたちが、
結婚して戻ってきて、子育てしている人もいる。
まさに故郷に帰って来たみたい、
実家に来ているみたいだって言っている。

施設が開いている日に、毎日お昼ご飯をつくるのは、
夢パークに来る前、
別の場所にいたときから続けている。

28年間、毎日つくっている。
毎日、お昼ご飯を40人分くらいつくっていること自体が、
奇跡的なことだよね。

メニューは、その日の10時半過ぎに
集まって来たメンバーで相談して決めている。
今日は、こだわりのジェノベーゼスパゲティ。
普通はバジルを使うけれど、
シソのソースなんだって。

中学生の女の子が、家で食べている自慢の味を
みんなに食べさせてくれるっていうんだよ。
シソは、裏の畑からさっき収穫してきたものだよ。

コンビニで買ってくると400円するスパゲティって、
自分でつくるといくらかな？
野菜ってこうやって洗って、
こうやって切ればいいんだねとか、

自分の味覚には
塩味がもうちょっと欲しいなとか、
こういうことがわかっていく環境って、
すごく大事だよね。
でもね、
今日も、料理を手伝う子もいれば、
手伝わない子もいるでしょ。

その時にすぐに手伝わなくてもいいと思う。
大人がどんな風に料理するかを、
見ているだけでもいい。
見ているだけでも、学んでいる。
できるようになっていく。

それからね、料理をしている時間も大切だよね。
「ながら相談」って呼んでいるけれど、
大人が野菜を刻んでいたりすると、
子どもが悩みを話し出す。
「昨日、お父さんとお母さんが
ケンカして大変だった」とか。
一番つらい話って、
相談室ではしゃべってくれない。
調理しているそばで、ぽろっと話すんだよね。

大人がつくる、「大丈夫だよー」という空気。
なぜだか知らないけれど、
これだけは子どもに伝わる。
当たり前に「おいしいね」って
うなずきあえる大人と子どもがいたら、
「おいしいね」でつながれる仲間がいたら、
これだけでいい。
これが大事。
これがあれば、安心してそこに居られる。
安心して過ごすうちに、
何かしたくなっていく。

28 年間、毎日お昼ごはんを一緒に
つくって一緒に食べてきたけれど、
これは、日々の暮らしの中で
ちょっとずつ生きていく力を
手に入れていくことを
しているのだと思う。

川崎市子ども夢パーク

「子どもたち一人ひとりが大事にされる」ことを実現するため、川崎市では2000年12月「子どもの権利に関する条例」ができました。この条例に基づきつくられた施設です。子どもが「やりたい」と思ったことにチャレンジできるよう、できるだけ禁止事項はつくらないで「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを大事にし、利用しているみんなでつくり続けている施設です。

プレーパークでは水や泥で自由に遊べます（この日は2000人の子が泥だらけになって遊ぶ「夢パまつり」の日）

バスケや卓球などができるスポーツ広場や音楽スタジオなどもあります

フリースペースえん

川崎市子ども夢パーク内で、学校や家庭、地域の中で居場所を見出せない子ども・若者の集まるフリースペースを運営しています。
毎日のお昼ご飯は、ここのキッチンでつくられています。

開設1周年（2004年）を記念して、みんなで描いた「えん」入口にある壁画

活動拠点
〒 213-0033 川崎市高津区下作延 5-30-1
川崎市子ども夢パーク内フリースペースえん
事務局
〒 213-0022 川崎市高津区千年 435-10
TEL 044-833-7562　FAX 044-833-7534

認定NPO法人
フリースペースたまりば
E-mail
freespace@tamariba.org
http://www.tamariba.org

おわりに

こども食堂を地域に定着させるために「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会を2016年に形成し、活動を進めてきました。2016年9月のキックオフミーティングから始まり、各地のこども食堂実施団体が自治体や社会福祉協議会他関係機関と連携をとりながら実行委員会形式にて、ロゴ・ポスター・のぼり旗などのグッズを全国で共有しながらツアーは各地で取り組まれ、3年目の2018年度には47都道府県50カ所にて開催されるに至りました。全国ツアーにはこれまで延べ1万人以上の方が参加されています。2016年度当初にこども食堂は300カ所程度と報道されましたが、2018年4月には2200カ所を超えたと報じられ、現在ではそれ以上に広がっていることが予測されます。今では、こども食堂は、子どもを中心にした地域みんなの居場所として、知られるようになりました。

こうしたこども食堂の取り組みへの理解を深めようと、『広がれ、こども食堂の輪！活動ガイドブック』をシリーズで3冊作成しました。

第1冊目のガイドブック（http://www.mow.jp/pdf/3.27_kodomo_2）には、プレーパークや児童館、青少年の居場所、引きこもり支援など、こども食堂の可能性と広がりに期待をして多様な活動をご紹介させて頂きました。第2冊目（http://www.mow.jp/pdf/kodomoguide_2.pdf）には、こども食堂が地域資源とつながることに期待して多様な連携事例をご紹介させて頂きました。さらに、こども食堂の実施団体に向けて、食品衛生とアレルギー、食育を推進するために「こども食堂　あんしん手帖～みんなで“おいしい”を続けるために（http://mow.jp/pdf/0718_kodomoshokudo_annshinn.pdf）」を民間企業や財団にご協力頂き作成しました。そして、第3冊目が本書です。

これらのガイドブックは、各地のこども食堂全国ツアーのご来場者の皆さま、各地の実行委員会メンバーを通じてこども食堂の実施団体や全国の自治体、社会福祉協議会、単位民児協など多くの方々に配付させて頂きました。

2016年の春から、実行委員会形式にて活動を続けてきました。以降もこども食堂の活動を支えるために、多くの関連する方々にご賛同頂き、理解と相互連携のあり方を模索して参りました。2019年度より、こども食堂関係者に加えて、多様な関係機関がゆるやかに連携する「広がれ、こども食堂の輪！」推進会議として、子どもの居場所が継続して活動できるよう支援を続けていきます。

最後になりましたが、この冊子は中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」より助成をいただき作成・発行することができました。あわせて「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアーの開催にご支援下さいました関係者の皆様、ご参加頂きました皆様に心より謝辞を申し上げます。

「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会

副代表　平野覚治

この冊子は、赤い羽根福祉基金の
社会を良くするたしかな一歩
赤い羽根
福祉基金
助成により作成しています。

広がれ、こども食堂の輪!

続けるための

支える・つながりづくり編

活動ガイドブック

発行 「広がれ、こども食堂の輪!」
全国ツアー実行委員会 テキストプロジェクト

一般社団法人 全国食支援活動協力会内
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21
http://www.mow.jp

この冊子はプライバシー保護に配慮して作成しております。
本誌掲載記事・写真等の無断転載を禁じます。

2019年3月